

スペクタクルについて

(2) スペクタクルとしての祭り

中 村 啓 佑

Du spectacle

(2) 《Matsuri》 en tant que spectacle

Keisuke NAKAMURA

は じ め に

日本の祭の大きな変わり目は、「見物と称する群の発生、即ち祭の参加者の中に、信仰を共にせざる人々、言わばただ審美的の立場から、この行事を観望する者の現はれたことである¹⁾」。

柳田国男がこう指摘してから半世紀以上が過ぎた。その間、祭る人々、すなわち信仰をともにする人々はますます少なくなり、その一方で祭りというイベントを観望する者は加速度的に増大した。いや、今では現代日本人のほとんどが「見物と称する群」に入っているとさえ言えるであろう。

本論の目的は、この一億総見物人化傾向を慨嘆することでもなければ、見物群の発生と増加の後を歴史的に跡付けることでもない。むしろ、祭りを見物の対象、すなわちスペクタクルの一種として考察することである。近年さまざまな「スペクタクル」に興味を抱くようになった筆者にとって、なぜ祭りはスペクタクルになったのか、祭りのスペクタクル的性質はどのように進化・発展してきたのか、それぞれの時代に、そのスペクタクル性を増幅していった原動力は何であったのか、そしてスペクタクルと化しながらも、他の種類のスペクタクルとどのように異なった特質をもっているのか、等々の疑問が次々と湧いてきた。本論はそうした多岐にわたる問題を考える第一歩である。

最初に、祭りがスペクタクルとなる要因がどこにあったかを一般的に考察し、その後典型的

スペクタクルとなった江戸天下祭の祭礼行列を俯瞰し、御旅所祭りの原型となった祇園祭の成り立ちを概観した上で、現代の映像に現われる祭りを分析する。最後に、こうした考察を念頭におきながら、スペクタクルとしての祭りの特性がどのあたりにあるかを明らかにしたい。

筆者は、前稿同様「スペクタクル」の語をもっとも広い意味で、すなわちフランス語“spectacle”本来の意味で用いている。この語の一般的な意味は、「視覚において人間の注意を引くもの」であり、「ひまにまかせ、驚きをもって眺めるような光景である」。さらに、そうした光景を人間が意図的、組織的に作り出すとき、具体的な意味、すなわち、演劇、映画、ダンス・バレエ、レビュー、サーカスなどになるのであり、見る者はそこに、ある種の驚きや楽しみを味わうことができる²⁾。

それでは、祭りとはどのようなスペクタクルなのであろうか。

1. 神事から見物の対象へ³⁾

「祭り」とは、本来、神を迎え、神に奉仕することであった。酒食をもって神をもてなし、神とともに饗宴し、神を送り出す一連の宗教的行為であった。

これに対して、我々が経験する祭りは、神輿や山車の勇壮華美な行列があり、それを見ようとする見物人が集まり、その群衆をあてこんだ夜店や見世物が居並び、集う者の心を浮き立たせる一大イベントである。すなわち、いたるところに大小のスペクタクルがあり、それらがまた全体となって大きなスペクタクルを形成するところの、興奮せる数日間である。

私たちが祭りに見るこうした諸現象はとっぜん現われたものではなく、長い歴史にそって少しずつ新たな要素が付け加えられ、変化・発展してきたものであろうが、それは、どのような段階を踏んでいるのであろうか。

その諸要因の中でも最大のものは、神のよりましの移動を可能にした幣の出現であろう。神を迎えるには、神が降臨するための目印となるような場が必要であった。それは自然の光景においてひととき目を引くもの、例えば巨岩や群れを抜く大木であったと推測される。それが神のよりましであり、祭りの場であった。やがて、木や柱をたてることによって別の場に神を迎えることが可能になり、さらには幣、ミテグラ（手にもつクラ）の出現によって神のよりましの移動や巡幸を可能にしたものと思われる。御幣を手を持つ者は神の代理者、代弁人と考えられ、神が氏子の住んでいる地域を巡幸することができるようになったのである⁴⁾。これが、将来大々的な行列へと変わってゆく神座移動のはじめである。ここに見物の発生する大きな要因があった。というのも、精進潔斎し、籠ることによって神を迎える人たち、すなわち祭りを主催する当事者たち以外の人々もまた、巡幸の道に神を迎えることができるようになったからである。正確に言うならば、ミテグラをもった神の代理者をとおして神を迎えることができるようになったのである。しかしながら、ここでは見物はまだ信仰をともしする人々であり、同じ

共同体の成員たちであった。

ところが、祭りの中でも、共同体の経済力が強い場合や、祭りの主催者が強い政治力をもつ者である場合、巡幸の行列は次第に華美なものとなって近隣の評判となり、やがては遠方から見物に訪れるような祭りが現われる。祭りの行列を眺め、祭りを行なう神社周辺の喧騒と興奮を味わうために集まる人々、すなわち「信仰を共にせざる人々」が現われたのである。

ところで、祭りにおいて人々の目をひく対象とは何であろうか。先の考察からもわかるように、その最たるものは神輿、山車、屋台などをともなう賑々しい行列であるが、これについては後で詳しく触れるとして、他にも、もともと人々の注目を引く要素があり、現在なお見物の対象となっているものは少なくない。

先にも触れたように、祭りとは神をもてなすことである。日本の祭りの大きな特徴は、「人が最上級の賓客を迎えた場合と、完全によく似ていることである⁵⁾」と柳田は言う。すなわち、酒食を供するだけではなく、神が「少しでも永く楽しみを続けたまふように、有りとあらゆる手段を尽くす」のである。

さまざまな手段の内でも、第一に目につくのは火をたいて明るくすることである。薪の火の燃え盛るのを眺めながら酒宴をするのは、昔の人たちの大きな喜びであった。現代と違って照明方法のない時代のことである。暗い夜を照らすかがり火やたいまつは、さぞかし人々を引き付け、ときに見る人の心をあたため、またときに沸き立たせたことであろう。火と光は、洋の東西を問わず、もっとも原初的スペクタクルである。油の火から蠟燭に、そして電気照明にいたって、ますますその効果は大きくなっていったと言わねばならない。ねぶたの燈籠、秩父の夜祭の照明と仕掛け花火、それに鞍馬に代表される火祭りなど、火と光の祭りの例にはこと欠かない。

歌や踊りや音曲が人を喜ばせるものならば、とうぜん神もお喜びになるに違いないとするのは、神に酒食をささげ、それをともにする人々にとってごく自然な考えであった。もちろん、現代人のいう歌や踊りや音楽が最初からあったわけではなく、むしろ逆に、神を喜ばせようとするくさぐさの遊びが芸能の起源であり、後世の歌や踊りや音曲に連なっていると考えべきであろう。したがって、祭りは二つの意味でスペクタクルを生み出したのである。すなわち、ひとつは、神楽から散楽へ、さらには猿楽・田楽から能・狂言へと到る舞台芸能を生み出したという意味でスペクタクルの祖であり、一方では、祭りの一部である歌や舞いやその他、さまざまな技が、今日なおスペクタクルとして人を魅了し、見物人を集めているという意味である。

所作に演劇的要素が濃く見られ、後世芝居の意味に用いられている「わざおぎ」もまた、神遊びのバリエーションである。「わざおぎ」は、今日なお行われている田植え祭りや田遊びの中に残存している。東京板橋の田遊びで知られる徳丸と下赤塚の田遊びが有名であり、それは米づくりの一連の過程をまねる所作からなりたっている。田打ち、代かき、種まき、鳥追い、

田植えとつづき、稲刈り、稲むら積みでおわりとなる。このような、神の力をたたえ豊作を祈願する「聖なるまねごと」から芝居が発生したのであろう。この意味でも、祭りは近・現代スペクタクルの原型であり、同時にそれ自体が今日なおスペクタクルであり続けるのである⁶⁾。

神がかりしたよりましの口から発せられることばだけが神意を問う方法ではなかった。さまざまな占いのうちでも、祭りにおいて神意をたずねるための弓と馬の競技は、そのスピードと華麗さと技の巧みさによって、古来から多くの見物客を集めた。そして祭りそのものはあまり注意を引かなくなっても、流鏝馬や馬駆けだけは年中行事としてテレビの歳時記的ニュースを彩っている。なかでも鶴岡八幡宮の流鏝馬、相馬野馬追、加茂の馬競などが有名である。一方、相撲もまた年占いの祭事から発生したことはよく知られており、行司の「ハッケヨイ（八卦良い）」ということばに、その名残をとどめている。弓にしろ、馬にしろ、また相撲にしろ、現代においてスポーツとなったスペクタクルの起源は祭りにあったのである。

2. 江戸の祭りと行列

それでは、祭りにおいてもっとも人々の興味を引く行列は、どのようなものであろうか。ここでは、スペクタクルとして完成をみた江戸時代の祭り風景、特に天下祭と呼ばれる山王権現と神田明神の祭礼行列を中心に、行列の豪華さを検証することにしよう。ちなみに、この二つだけが天下祭と呼ばれたのは、神輿を中心とする祭礼行列が江戸城内に入り、しばしば将軍の上覧を受けたこと、さらには、幕府が祭礼費用の一部を出したことに由来するものである。

山王権現は6月15日、神田明神は9月15日が祭礼日で、この日両社は早朝に神社を出て、ほどなく氏子各町の山車・屋台の行列を引きつれて江戸城に入り、常磐橋門から城外へ出て、日本橋から神田・京橋通りの氏子町をめぐり、その日の夜、あるいは深夜になって帰社した。このように、祭礼日に氏子町々を神輿行列がまわるのは、江戸時代の、とくに江戸における神社の祭礼の典型的スタイルだったという⁷⁾。

もちろん、祭礼行列の巡幸は本来、神事の一環であった。したがって行列の中心は、本来神の座である神輿であった。しかし、人々の関心は神輿よりも神輿に付随する山車へと移り、天下祭は、江戸市民にとって単なる宗教的行事を超えて、「人々を熱狂させたイベント」となり、スペクタクルとなった。

山車行列は、こまかく分けると定式の山車と附祭に分けられるという⁸⁾。山車がどれほど視覚的に人々をひきつけ興奮させたかは、『神田御祭礼番付』や『江戸名所図会』などの資料の図を見なければわかりにくい。本論では簡単な説明をほどこすにとどめざるを得ない。

山車は各町が原則として恒例の主題のもとに、人形や飾りを仕立て、どここの山車といえどどここの町というぐあいに、山車の主題がいわば町のシンボルとして定着していったと言われている⁹⁾。たとえば、小網町であれば「網打ち人形」、住吉町であれば「住吉の景」、南大工

町の「棟上道具」という具合である。

一方、こうした定式の山車に対して、附祭は各祭礼ごとに内容が一新され、時代によっては数もほとんど無制限の観があり、出し物の規模も大きくて見ばえがすることから、江戸市民にとっては、祭礼の中心の出し物、アトラクションのように受け取られていた。毎年一新され、各町が交替で担当するため、その年の流行の粋を集めたような行列となり、年々競って華美になったのは自然の勢いであろう。

附祭とは、一般に踊屋台、地走踊り、練物の三種である。踊屋台、地走踊りが、その名のとおり芸能を中心にしたものであるのに対し、練物や曳き物といった出し物は、しばしば大きな造り物を仕立て、仮装した人々がこの造り物に添って練り歩くといったものであった⁸⁾。山王祭における練物の著名な例としては、麴町の象の造り物、神田祭礼の「大江山凱陣」があげられる。つまり「附祭の趣向をこらすには、敏感に流行を取り入れた主題や、『御伽草子』などの昔話、能、歌舞伎などからとった「お馴染み」のテーマ」など⁹⁾が好まれた。

山車が基本的に変わらず、どこの氏子町のものであるかがわかることによって、住民たちは季節の繰返しを確認して安心感を覚えるとともに、自分たちの町の歴史と都市的役割を再確認することになる。そこには、変わらぬものとしての郷土愛、江戸っ子としての自負や氏子としての誇りが感じられる。一方、象の造り物にしる大江山凱陣にしる、その奇抜さは人々を喜ばせたに違いない。象はニュース性の大きいものだったし、大江山凱陣のテーマそのものは子供にもなじみのものであるとはいえ、「江戸名所図会¹⁰⁾」に見られるような、鬼の首の巨大さは見る者の度肝をぬいたことであろう。

この図会には、階下だけではなく、2階からも多くの人たちが見物している様子が描かれている。これは、特別にしつらえられた栈敷ではなく一般の建物らしく思われるが、建物の前に栈敷が作られ見物人がいることを見ても、「見る」ということが祭りの大きな目的の一つになっていたことは疑いない。さらに注目すべきは、祭礼が江戸城内をとおるさいには、将軍やその家族が祭礼見物、すなわち「上覧」を度々行なったという事実である。

上覧については、スペクタクルという点で面白い記録が残っている。

それは、山王権現の別当・神主から奉行所に出された嘆願書である。そこには、「上覧所前で神輿及び獅子頭が滞らないよう、附祭などをどけて欲しい」ということが度々書かれている¹¹⁾。ということは、上覧所においては附祭の方に関心が高く、こちらの方に時間がかかって神輿の通行を滞らせたのではないだろうか。

そのことを十分に伺わせるのは、文政時代末から天保時代にかけて行なわれていた「透見」という習慣である。「透見」とは、将軍家と婚姻関係にある大名や有力大名の屋敷の一角に物見所を設け、そこから屋敷を通りかかる祭礼行列を見物することである。普通、その物見所の前の道に白い標が立てられ、祭礼の行列に供奉する山車、附祭の類は、それぞれ順番にした

がって、その標にさしかかると立ち止まって所作事を披露しなければならない。場合によっては、わざわざ道筋を変更しなければならないから祭礼の行列が混乱をきたし、神輿行列が遅延させられることになる。これは神社側では最も嫌うことであり、幕府もこうした行為に禁令を出している。上覧にせよ、「透見」の習慣にせよ、天下祭が將軍家や大名にとっても強い関心事であり、肝心の神輿よりも山車、附祭に視線が注がれた証拠だと推察される。

さらにもう一つ、18世紀に入って祭礼行列の華美抑制政策がとられていたにもかかわらず、突然、安政6年(1860)の山王祭は、縮小されない、かつての盛儀そのままの形で行なわれた。これは幕府の景気上昇政策であると同時に、外国人寄留者の目に触れる機会を想定したものであり、実際万延元年の山王祭のときには外国人がはじめて祭礼見物を許されたと伝えられている。すこし誇張しているならば、このとき、天下祭は国際的スペクタクルになったと言えよう。祭りが純然たるスペクタクルになった好例である¹²⁾。

3. 大規模祭礼行列の発展

幣を手にした神のよりましが氏子たちの間をめぐる素朴な行列と、今見てきたような江戸天下祭の違いはあまりに大きい。神の座の移動は、いつのころからスペクタクルとしての性格を強めたのであろうか。時代的考証はこの論文の仕事ではないが、次のことだけは言えるであろう。すなわち、「神輿の渡御、之に伴ふ色々の美しい行列¹³⁾」が平安京の祭りに源を発しており、平安時代、11世紀の頃には、祭りが大々的な見物の対象になっていたことである。というのも、祭り見物といえば、誰しもが『源氏物語』(葵の巻)における加茂祭、なかでも、葵上と六条御息所の車争いを思い起こすからである。「ところどころの御棧敷、心ゝ、しつくしたるしつらひ、人の袖口さへ、いみじき見物なり¹⁴⁾」と書かれているから、行列の華やかさもさることながら、装った見物の興奮までが伝わってきて、すでに祭りが平安京の大きなスペクタクルであったことがよくわかる。

それでは素朴な神の座の移動は、どのようにして、神輿、山車、屋台をとまなう大行列となったのであろうか。近世の華やかな祭礼行列のモデルになったと言われている祇園祭について、これもスペクタクルという面から、その発展段階を略述したい。

祇園祭は、その発生と祭の形態において、最初に見た古代氏神祭祀とは異なっている。すなわち、それは氏子を保護する氏神を定期的に呼び迎えるための祭ではなく、政争に敗れ非業の死をとげた人々の怨霊を慰撫し都の外へ送り出すことによって、頻発する疫病から逃れようとする御霊会を始原としているからである¹⁵⁾。しかも、神社があって祭りが行なわれるのではなく、まず祭りがあり、その後で祇園社が出来たという経緯がある。いずれも9世紀のことである。

祇園祭成立の第2段階は、10世紀後半の御旅所の開設である。祇園祭は、神輿が本社から

御旅所に渡御し、一定期間留まって盛大に祭られ、氏子地区を巡幸して本社に還御する、いわゆる御旅所祭の一つである¹⁶⁾。神霊を住民の生活領域に迎え入れるのであるから、それは恐るべき祟り神ではなく、「住民の期待に応える神への神格の転位なしには成り立たない。御旅所に迎え祭る神は、祟りを除き鎮める威力ある神でなければならない」。それが、祇園社・感神院の祀る牛頭天皇であった。こうして住民を保護し、災厄の発生を防いでくれる神を自らの領域に招き入れたとき、巡幸が宗教的願望のみならず審美的欲望をも満足させる祭りとしての第一歩が踏み出されたのである。このように祇園祭の基本形が定まったのは遅くとも11世紀初頭のことで考えられる。そして12世紀初頭には、三基の神輿を中心とした還幸の行列の形態が出来上がり、棧敷が設けられて法王や関白以下の貴顕が競ってこれを見物したと伝えられているから¹⁷⁾、すでにこの頃祇園祭は見物の対象となっていたのである。

しかし、人々が競って見物するからには、とうぜん耳目を喜ばせるもの、あるいはまた人々を興奮させるものがなければならない。11世紀から12世紀にかけて、最も人々の注目を集めたのは、神輿そのものではなく、むしろそれを供奉する渡物であり、なかでも馬長と風流田楽であった。

馬長は、馬長童とも呼ばれたように、美しく装わせた童（児）を馬に乗せて練り歩かせたものである。祇園祭の華として、馬の口取りやお供の雑色らの趣向をこらした風流の出立ちとあわせ、大いなる楽しみとされていた¹⁸⁾。

一方、風流田楽も11世紀末から爆発的流行を見せる。それは、田植えを囃す田楽と田楽法師の田楽芸を中心に舞楽なども混じった素人衆の田楽であったと言われる。それは「芸能を楽しむというより、風流を擬し集団で練り歩くのが主眼であり、1096年の夏5月から3ヶ月にわたり、平安京は浮かれあるくその集団に席卷された」。祇園会はその格好の舞台となったのである。風流田楽はその後も行われ、南北朝期まで継承されたという¹⁹⁾。

次に来るのが、山や鉦が出現する段階であるが、これについて詳しく論ずることは本論の目的を離れており、また専門外の筆者が考察できる問題ではない。ただ山鉦が鎌倉末期に風流拍子物として登場し、南北朝にその形態を整えていったことが諸資料から伺われるという。風流拍子物の意味の変遷について、植木行宣は次のように述べている。

風流拍子物は神霊の送迎、なかでも疫神など災いの還却を願う囃すという行為から出た群衆の踊りである。芸能としての特質は、鞆鼓や太鼓など打ち物系の楽器を踊り子が自ら打ち踊るところにあり、風流を特色とした。風流とはもともと趣向をこらした作り物（造形物）をいい、転じてそれらによる修飾、さらには趣向をこらす行為をいった。それがついには風流と称しもっぱら拍子物、踊りを指すにいたったのであるが、それは、拍子物が作り物や仮装に趣向をこらし、風流と拍子が一体の行為となって衆目を集めたことによる

であろう²⁰⁾。

そして16世紀の図会によると、現在私たちが見ている祇園祭とほぼ同じ形態が成立していたと考えられる²¹⁾。室町時代も後期には、本来神事の一環であった山鉦巡行が、ときには神事ぬきで行なわれたほど町衆運営の独立性を強めている。このことは、祭りが町衆にとって生活に根ざした、きわめて重要な季節のイベントであると同時に、見物衆から期待されていたスペクタクルであったことを示すものであろう。

近世の祇園祭については、山や鉦、それにお囃子を奉納する囃舞台、それぞれの山の伝来の主題を表す人形類とともに、山鉦骨組部材を覆うためにかけられる、はなやかな懸粧品を無視することはできない。日本には見られない動植物、風景など、異国趣味豊かな大型染色品が、鎖国下の観衆の目をひいたことは当然であろう。調査によれば、生産地は中国、中国近辺、朝鮮、インド、パキスタン、アフガニスタン、ペルシャ、カザフスタン、トルコ、ヨーロッパにまたがるという。そしてその中には、驚いたことに『旧約聖書』：イサクに水を供するリベカや『イーリアス』：トロイアの戦争物語を主題とするタピストリーまでが含まれるのである²²⁾。

還幸行列の山鉦の形態の変化や巨大化にせよ、また鉦車本体を飾る染色品の織物にせよ、神楽、舞、田楽などの御旅所での神事芸能や仮装し乱舞する拍子物にせよ、風流の名のもとに時代時代の新傾向、新機軸を追求して今日に到っているのであり、であればこそ、こうした御旅所祭りの形態は畿内はもとより全国一円に広がり、例えば先に見た江戸の祭りの祭礼行列にまで影響を及ぼしているのである。

4. 映像の祭りと現実の祭り

御旅所祭りにおける神輿渡御、山車、屋台を中心とする行列の華やかな形は祇園祭をもって定型化したといえるであろう。しかし、祭りが神事を離れたスペクタクルとなるためには、さらに、いくつかの段階が考えられるであろう

明治維新は、それまでの伝統を疑問視したという意味で大きな文化革命であったし、都市構造の変化は、祭りの実施にも少なからぬ影響を与えた。町方が経済的な負担に耐えられなくなったこともあって、江戸の祭りの山車の多くが近隣地方に流れたことが跡付けられている。

しかし、変化はそればかりではない。氏子と氏神の関係が強く意識されている社会、すなわち、多くの人たちが生まれた土地を離れることのないような時代、社会的共同体が同時に宗教的共同体でもあるような時代、言い換えれば、生活のはしばしに神が意識されるような時代にあっては、祭りの見物者の多くは、同時に祭りの参詣者でもあった。祭りが神事であることは、まだ完全に忘れられたとは言えないのである。しかし産業社会の到来とともに、多くの若者が故郷を離れて都会に流入し、教育の普及にともなって表面的西欧合理主義が浸透し過去の風習

を軽視するにつれて、伝統的信仰形態は次第に失われていったと思われる。

しかし、もっとも著しい変化を見せるのは、第2次大戦後の社会であろう。過去的生活風習がすべて否定されると同時に、あるいは合理主義的、あるいは習慣的無神論が蔓延するにつれて、参詣者ではない純粹の見物は著しく増大した。さらには、テレビの普及によって祭りの中継さえ行なわれるようになると、祭りの場に足を運ばずとも、まるで芝居の中継を見るように、そのクライマックスだけを見ることができるようになったのである。参詣をとまなわない見物人の増大と、祭りの場から遠く離れて見る観客ないしは視聴者の出現、これはまた日本の祭りの大きな変わり目ではないであろうか。

というのも、信仰者であるなしにかかわらず、祭りの匂いと熱気とエネルギーを共感することなしに、すなわち祭りで経験する身体的感覚と無関係な空間において、音声と映像だけを受け取ることが可能になったのである。祭りにおける連帯的な感動や、爆発するエネルギーの生み出す緊張感、躍動感、危険性からも遮断され、自己の存在と無関係な映像として、安全で、快適で、またそれだけに興奮をとまなわないリビングルームで眺めるスペクタクル、いわばスポーツ番組や歌番組と同列に置かれたのである。

しかし、それだけではなかった。祭りのテレビ中継は、まだしも祭りの場と家庭とを結んでいたのである。たとえそれが冷めた体験ではあっても、祭りの場から送られてくる映像には、ある種の季節感と臨場感がともなったはずである。ところが、例えば祭りの行列を彩る神輿行列、舞、お囃子などがとりはずされて、それだけがテレビ番組の舞台に登場するに及んで(NHK テレビ「ふるさとの歌祭り」²³⁾)、祭りは解体され、断片化されて、祭りを行なう土地や季節からも切り離されて完全なショーと化した。スペクタクルとしての祭りは、これをもって一つの極に達したと言うべきであろう。

このように見てくると、祭りというスペクタクルには、大別して3種類の見物人が考えられるのではないだろうか。まず第一は、祭りの行なわれる土地の住民である。第二は、遠来の見物客である。彼等にとっては、祭りの行われる神社も、還幸行列が繰り広げられる町並みやその背景となる自然も、すべてが目新しいものであり、祭りそのものはもちろん、祭りの場までが同時にスペクタクルを形成している。先に見たテレビ中継や観光産業の発展によって、近年こうした見物人＝観光客の数は大幅に増大したものと考えられる。ちなみに、今年の「ねぶた祭り」の見物客は148万人と伝えられている²⁴⁾。弘前市の人口が17万人であることを考えれば、市外からの見物客がいかに多いかがわかる。第三の見物人としては、先に触れたテレビ中継の視聴者がある。例えば祇園祭や天神祭の視聴者がそれである。

土地の住民の場合には、氏子であるか、氏子以外の近隣の住民であるかによって、祭りに対する親近感は大きく違って来るであろう。氏子たちにとっては祭りはハレの日であるが、かといって、日常からまったく切り離されたものではない。まず日常生活の場が日常とは違った装

いを見せることに対する一種の感慨があるであろう。そして見る者は、神輿のかつぎ手や群舞の踊り子の中に、家族、友人、恋人を見出して心を躍らせる。そこにあるのは、同じような行列風景には違いないけれども、年々歳々同じ人ではない。祭りは巡り来るものでありながら、一人ひとりの人間にとっては大きな節目でもあるのだ。

しかしながら、かつて明瞭であったこのような「祭りをする人＝氏子」と「祭りを見る人＝氏子以外の人々」という区別が、祭りの形態の変化とともになくなりつつあるという事実を付け加えておく必要がある。

というのも、低迷する祭りを盛り上げるために女神輿の担ぎ手をオープン参加方式で募集する祭りが現われた。1985年に先鞭をつけたのは神田明神の祭礼であり、この方式は以降ますます盛んになるとともに他の祭りにも波及し今日にいたっている。ということは、現代の神田祭りを支えているのは氏子ではなく、他所者の女性たちなのである。その根底には都市構造の変化からくる世帯数の激変があり、神輿の担ぎ手を町内で補充できないという事態があった²⁵⁾。これもまた、時代時代の風流をとり入れながら変貌してきた都市祝祭の表れ方と言えよう。このように考えるならば、テレビ中継や、テレビのショウと化した祭りの断片も、祭りのローカル性をはぎとり、全国レベルでのスペクタクルとすることによって、新しい祭りの創出に大きな役割を果たしているのかもしれない。

お わ り に

祭りが人々の目を惹くようになった遠因は、古代祭祀における変化の中にあった。本来神は明確な標をもった祭りの場に降臨すると考えられた。その神を迎え、酒食をもって神をもてなし、神とともに饗宴し、神を送り出す一連の宗教的行為が祭りだったのである。

生活の変化にしたがって、新たな場に神を迎える必要が生じたとき、人々は新たに用意した木や柱にも神が降臨すると考えた。そして、そうした考えは、やがて、幣、ミテグラを生み出し、神の座の移動を可能にした。ここに祭礼行列の遠い出発点がある。

より大きく、より華やかになった行列は見物の対象となってゆくが、もう一方で、神をもてなすために行われたさまざまな業もまた、神のみならず人の目を喜ばすこととなり、芸能という別種のスペクタクルへの道をたどった。

さらに、もう一つ忘れてはならないのは、疫病を怨霊のたたりと考えて怨霊を人形や幣にとりつかせ、これを海や川へ流そうとした習慣である。祇園祭の発生に見られるこうした災いを送り流す習慣は、何百年にもわたって繰り返され、囃す側と囃される対象が一体となり、風流拍子物という形をとって祭りの行列を豪華に装っていった。従って、祭りを「見せるもの」、すなわちスペクタクルへと導いていった流れの底には、幸いをもたらす神を迎える祭りと災い

をもたらす神を追放する祭りの二つの相反する流れがあったと言えよう。

祭りがスペクタクルであるとすれば、それは、町や村という地域全体で繰り広げられる、バラエティに富んだ総合的スペクタクルだということである。すなわち、行列それ自体が移動するスペクタクルであることはいうまでもないが、その中に神輿、山車、屋台という華やかな造形があり、それに付随する神楽、舞、踊り、唄、囃子物、それに芝居と、それぞれ、本来一つずつが独立してスペクタクルとなるべきものが揃っているということである。小単位のスペクタクルが寄り集まって、空間の中を通過してゆく最大単位のスペクタクルなのである。

ここに、演劇という、固定した空間の中でくりひろげられるスペクタクルとの大きな違いがある。芝居では、すべての観客が同時に舞台上で繰り広げられる所作を見、同時に物語の進行を共有する。したがって、芝居では、人々は物語という時間を共有するのである。これに対して、祭りの見物人は、それぞれが異なった場所で、異なる時間帯の中で、繰り広げられる行列を見るのである。したがって、彼らは異なった時間において、移動する帯という空間を共有する。

演劇というフィクションの世界では、虚実をないまぜにして、ほとんど無限に新しい内容を作り出すことができる。これに対して祭りにあっては、行列の通過する道路の状況、天候、時には戦争や異変など、現実世界のさまざまな制約を受けざるをえない。新しい工夫があるとしても、伝統がある以上、それほど急激な変化を期待することはできない。

しかし、だからといって、毎年の祭りが同じ展開を見せるわけではない。祇園祭の歴史を見ても、風流田楽が集団的熱狂を見せた年（1096）²⁶⁾ もあれば、鉦衆に随行する兵具をともなった随員が紛争を引き起こすこともあった（1342）²⁷⁾。権門への不満が暴発したという意味で現実社会とかかわらざるをえないのである。また、神輿をかつぐ祭の興奮を利用して日ごろの鬱憤をはらそうとしたことなども、江戸・東京の祭り風景に見られる²⁸⁾。芝居が劇場という日常と無関係の閉じられた空間で展開される仮構世界のスペクタクルであるとすれば、祭りは、日常との接点を持たざるをえないスペクタクルである。ただし、このスペクタクルの担い手たちが神を垣間見ることができる興奮状態に陥っているのもまた事実であって、それは興奮の非日常なのである。

神がかった者、いわゆる「もの狂い」の状態に陥った者のことばと、そのことばに沿って自ずと表れた動作が芸能のはじまりであったことを我々は知っている。神をたたえ、神と遊ぶうちに現われた「わざ」が芝居のおこりであったこともまた知られている。祭礼行列に付随する踊りや芝居はまた、本来神を喜ばせるための、くさぐさの遊びから出たものであろう。芝居は、祭礼時の神社や御旅所に置かれた屋台において、あるいはまた曳き物としての屋台に現われて祭りを盛り上げている。しかし、それだけではない。ときとして行列に現われる仮装の人々は、また別の意味で芝居への一步を踏み出していると言えよう。なぜなら、仮装こそは現実からの離脱であり、見立ての世界で別の人格を獲得することなのだから。ストーリーと登場人物をそ

ろえた芝居という形をとってはいないが、少なくとも仮装するものが想定するフィクションの世界に遊ぶための装いだからである。源頼光に扮するものは、舞台とはことなった時間系列と様式の中で、その人物を演じているのである。それは芝居のように、物語として完結してはいないが、すくなくともある種の役者よりも、はるかに多くの見物の目を奪うことであろう。祭礼行列は、そうした意味でもまた芝居というスペクタクルとつながっているのである。

祭りは、多くのスペクタクルを含んだ、そして他のスペクタクルに通路を開いた多重構造のスペクタクルである。

本稿は、2001年度学内共同研究『アジア諸地域における祭りの比較研究——国家・共同体・家族』の報告書に大幅に手を加えて発展させたものである。

注

- 1) 柳田国男『日本の祭り』, 柳田国男全集 13, p. 382.
- 2) スペクタクルの定義については、中村啓佑「スペルタクルについて (1) その意味と場」『追手門学院大学文学部紀要第 37 号』, 「はじめに」及び注 2) を参照。
- 3) 「神事から見物の対象へ」については、主として、柳田国男『日本の祭り』, 柳田国男全集 13, 及び、宇野正人 (監修)『祭り日本人 信仰と習俗のルーツを探る』を参照した。
- 4) 『日本の祭り』, 「祭り場の標示」pp. 393-414, 及び、『祭り日本人 信仰と習俗のルーツを探る』pp. 30-31 を参照。
- 5) 前掲『日本の祭り』, 柳田国男全集 13, p. 439.
- 6) 守屋毅構成『日本の祭』, p. 14.
- 7) 豊田和「天下祭りと江戸の祭礼文化」, 加藤貴編『大江戸歴史の風景』, p. 110.
- 8) 前掲書 p. 113.
- 9) 西山松之助『江戸庶民の四季』, pp. 121-122.
- 10) 千代田区教育委員会『千代田区文化財調査報告書 11 続・江戸型山車のゆくえ ～天下祭及び祭礼文化伝播に関する調査・研究報告書』p. 9.
- 11) 前掲書 p. 128.
- 12) 前掲「天下祭りと江戸の祭礼文化」, 加藤貴編『大江戸歴史の風景』, pp. 112-113.
- 13) 前掲『日本の祭り』, 柳田国男全集 13, p. 381.
- 14) 『源氏物語 1』日本古典文学大系 14, p. 320.
- 15) 植木行宣「祇園祭の成立と山鉦」, 八木透編著『京都の夏祭りと民俗信仰』p. 3.
- 16) 前掲書, pp. 5-6.
- 17) 前掲書, p. 8.
- 18) 前掲書, p. 9.
- 19) 植木行宣『山・鉦・屋台の祭り 風流の開花』, p. 50.
- 20) 前掲書, p. 66.
- 21) 大島新一「祇園祭の歴史的背景とその変遷——神々の祭り・人々の祭り」, 前掲『京都の夏祭りと民俗信仰』p. 87.
- 22) 祇園祭山鉦連合会『祇園祭山鉦懸粧品調査報告書 渡来染色品の部』を参照した。

中 村 啓 佑

- 23) 昭和 41 年（1966）4 月 7 日から昭和 49（1974）年 3 月 28 日まで、最後の 4 回を除き宮田輝アナウンサーの司会で放送された。（NHK 放送博物館調べ）
- 24) 弘前市観光物産課による。
- 25) 松平 誠『現代ニッポン祭り考 都市祭りの伝統を創る人びと』, pp. 41－78.
- 26) 前掲「祇園祭の成立と山鉦」, 八木透編著『京都の夏祭りと民俗信仰』, p. 14.
- 27) 前掲書, p. 17.
- 28) 平出鏗二郎『東京風俗志 上』, p. 140.

参 考 文 献

- 植木行宣『山・鉦・屋台の祭り 風流の開花』白水社, 2001
宇野正人監修『祭り日本人 信仰と習俗のルーツを探る』青春出版社, 2002
加藤貴編『大江戸歴史の風景』山川出版社, 1999
諏訪春雄『日本の祭りと芸能 アジアからの視座』吉川弘文館, 1998
西山松之助『江戸庶民の四季』岩波セミナーブックス, 岩波書店, 1993
松平 誠『現代ニッポン祭り考 都市祭りの伝統を創る人びと』小学館 1994
守屋毅構成『日本の祭 祭りのサウンドスケープ』丸善, 1991
八木透編著『京都の夏祭りと民俗信仰』昭和堂, 2002,
平出鏗二郎『東京風俗志 上』ちくま文庫, 筑摩書房, 2000
柳田国男『日本の祭り』, 柳田国男全集 13, 筑摩書房, 1998
米山俊直『祇園祭 都市人類学ことはじめ』, 中公新書, 中央公論社, 1974

祇園祭山鉦連合会『祇園祭山鉦懸粧品調査報告書 渡来染色品の部』, 1992
千代田区教育委員会『千代田区文化財調査報告書 11 続・江戸型山車のゆくえ ～天下祭及び祭礼文化伝播に関する調査・研究報告書』, 1999